

黒田 裕 著

『今さら聞けない!? キリスト教
——聖書・聖書朗読・説教編』

教文館、2018年

牧 迫 隼
MAKISAKO Jun

2014年4月、日本聖公会の神学校であるウィリアムス神学館にて「今さら聞けない!? キリスト教講座」が信徒向けの講座として開講された。本書は、2015年に第二回目として行われた同講座「み言葉の奉仕（聖書、聖書朗読、説教）編」（全10回）の講義録を再構成し、加筆修正して書籍の形にまとめ直したものである。本書は、著者である黒田裕氏の属する聖公会など典礼的な教会が、ここ数十年の間主日礼拝として重視してきた「み言葉」と「聖餐」、これらふたつの聖餐式の構造のもと構成されている。聖公会の式次第は、まず初めに参入があり、次いで〈み言葉〉の部分である旧約聖書、詩編、使徒書、福音書、説教、ニケア信経、代祷、懺悔と続く。そして〈聖餐〉の部分で平和の挨拶、奉献、主の祈り、陪餐、祝福、最後に派遣の唱和で式が終了する（4頁）。本書は特にこの前半部分である「み言葉」の部にかかわる聖書、聖書朗読、説教をテーマとして礼拝での順序にしたがって配されている。

第一章の聖書は、そもそも聖書とは何か、いつ、どこで、誰によって、何語で書かれ、誰に向けて書かれたものなのか、という問いについて、4節に区切って平易な言葉で詳細に説明する形となっている。まず基本的な「旧約聖書」と「新約聖書」の区分から始まり、聖書の構成、語源と続いていく。特に、「聖書を書いたのは神ではないか」という疑問について、「逐語靈感説」（原文の一語一語を忠実に神の靈感を受けて書かれたものであり、誤

謬は含まれていないとする説)を例に、英国国教会の教理的立場を明確化している「三十九箇条」や一六世紀英国宗教改革時代のトマス・クランマー大主教によって起草された「第一祈祷書」の特祷文と対比させて聖公会の神学的立場を述べている点が、聖公会信徒として個人的に目を惹く興味深い箇所である。黒田氏は、神は聖書記者が聖書を記すことを「引き起こし」、「もたらし」、その「原因」となったと述べ、聖書記者たちは聖霊を受けた信仰共同体の一員として靈感を受け、その導きに従って聖書を書いたと述べている(33頁)。「神が聖書を記させられた」という表現が、聖公会の神学として英国宗教改革者たちの思想的立場を反映している部分であり、このことは今まで聖公会の聖書解釈の背景知識を全く持っていない読者にも新たな気づきや学びを与えてくれるものではないかと私見する。その後は、正典としての聖書の役割と成立、聖書各書の配列、聖書に関する様々な質問と順を追って進んでいく。特に、3節の聖書各書の配列では、聖書各書の配列自体がもたらす意味について、黒田氏独自の造語である「配列の神学」を提示し、それは私達が手にしている祈祷書がまさに「配列の神学」に満ちており、聖公会信徒にとって大変馴染み深いものであると述べている(83頁)。

第二章の聖書朗読では、なぜ聖餐式聖書日課を使用するのか、その歴史的背景、どのように聖書箇所は選ばれているのか、なぜ福音書朗読は聖職者にしか許されていないのか、聖書朗読でどのようなことに気をつけたらよいか、聖書朗読の位置や場所についてなど、一般信徒の朗読奉仕者にも役立つ内容が多く含まれている。そのような意味では、この第二章は朗読奉仕者への実践的指南を兼ねた有益な部分であると言える。

「理想的な朗読とは何か」。こうした問いを考えると時の手がかりとして、黒田氏は一六世紀後半の英国国教会神学者で、その後の聖公会神学(アングリカニズム)に決定的な影響を与えたりチャード・フッカーの『教会政治理法論』の主張を紹介している。当時、フッカーの論敵であったピューリタン(エリザベス一世の宗教改革を不徹底とし、さらなる改革を求め英国国教会の神学や礼拝を批判、否定した英国国教会内の運動)は、説教壇から説教がなされる時にのみ、神の言葉が聴衆に聞き取れるものとなる、と主張してい

た (127 頁)。これに対しフッカーは、神の言葉を聞くことが礼拝に不可欠で本質的な要素であることに同意しつつ、説教を伴わなくとも聖書朗読それ自体が、現に神の言葉の宣言となることを論じた (127 頁)。本書にはフッカーが聖書朗読の意義を語った点について次のように書いている。

聖書の使用について言えば、とりわけそれが公けに朗読される時、神の教会はその手段によってはかりしれない善を刈り入れてきたのである。われわれがよく知っているように、あらゆる教会の事情は、書きとめるべき特有の機会を与え、全教会の指導のためにそれが発表されえたとし、そのことが朗読によってなされることを使徒聖パウロが求めたことは正当な理由があったのである。(128-129 頁)

聖書朗読という奉仕は、朗読者という「わたし」の発表ではなく、イエス・キリストを通した神からの福音の宣言が会衆に全て届くよう伝わらなければならない (129 頁)。評者自身、普段の礼拝奉仕の中で聖書朗読や詩編の交唱部分を担当する機会が数多くあり、今回の第二章を読み、改めて聖書朗読の役割の大きさや大切さを感じる事ができた。もちろん、朗読奉仕者以外にも、普段あまり知る事の出来ない聖書朗読の本質や朗読時の位置や場所について、詳細に学ぶことのできる貴重な章である。

第三章の説教では、説教とは何だろうかという本質的な問いから始まり、なぜ聖餐式の中に説教があるのか、「説教」はなぜ聖職者にしか許されていないのか、説教はなぜ説教台でされるのか、なぜ説教の前後に祈りがあるのか、説教テキストの選び方、説教の準備とテーマ決め、子どもと説教など、これまで聖職者のみが知り得ていた説教の知識について、各節懇切丁寧に説明する形となっている。評者自身も礼拝奉仕の際、祭壇の司祭が説教をするのを毎回楽しみにしており、「次はどんな説教を話してくださるのだろうか」「そもそも毎回の説教はどのようにして作られているのだろうか」など疑問が尽きなかった。本書に興味を抱いた読者も恐らく同じような感情を抱いていると思うが、そういう意味で、本章はこれまであまり触れられる事のなかつ

た説教について、具体的に多くの事を学ぶ事ができる稀有な章である。

黒田氏は、「説教」に関する新約聖書の言葉として、「告白する」「証しする」の意味を持つ「マルチュレオー」、「布告する」「知らせる」「宣べ伝える」「説教する」を意味する「ケーリュッソー」、「倫理的教訓」「護教的な弁証」「神学的教理の解説（とくにヨハネ福音書）」を意味する「ディダスコー」を例に挙げ、一つ目の「マルチュレオー」が語る者自身に密接に関わる言葉とするなら、他の二つ「ケーリュッソー」と「ディダスコー」は語られる事柄や語られる相手に関わる言葉ということができると述べている（138-140頁）。いま自分が語っているのは上に挙げた三つの言葉の内どれに当てはまるのか、説教者自身が自らに問いかけるのも自己の説教への反省として有益であると述べている（140頁）。本章で最も印象に残ったのは、5節の子どもと説教における「子どもに伝えるには」という部分である。この節は子どもたち一人ひとりの喜び、悲しみ、悔しき、困り、不安に直面する「生活の座」において、どのように聖書の福音を響かせることができるのであろうか、それが子どもたちに「説教」を語る黒田氏を含めた大人たち聖職者、会衆の課題として問題提起を行っている（182頁）。その中の箇所を心に響いた箇所を以下に引用する。

わたしたちは子どもと出会い、関わる「生活の座」を通して、一人ひとりの子どもがそれぞれ、神さまに受容されている、愛されていると実感し、自分は生きていても、ここにもよいのだという自己肯定感をもてるような使信を、福音として語るよう召されているのだと思っています。（184頁）

これから生まれてくる子どもたちや今現在の子どものたちに、一信徒として神様の愛や福音をどのように伝えるべきか、その責任が私たちにはある。その福音を伝える鍵が、本章で述べている「説教」にあると、評者個人は強く思う。子どもは大人とは異なり、非言語的、非概念的にものごとを理解する（185頁）。聖書のメッセージも「遊び」を通して、子どもたちが理解するよ

う努めようと黒田氏は述べている（185頁）。その点には、評者も強く同意する。

本書で扱われている学びは、特に「み言葉」の礼拝奉仕に参加する者に向けて書かれたものであり、評者自身、信徒として礼拝奉仕を日常的に行う者としてその務めへの思いを新たにすものであった。これから本書を手にする者たちがそれぞれの礼拝奉仕への思いを新たにすることができればと願ってやまない。

（本学大学院キリスト教学研究科キリスト教学専攻博士課程前期課程）